天地

ネットワークテーブル　558号

天地シニアネットワーク　2024. 8. 16

TENTI TODAY （広島に帰る）（すどう美術館・作品展と落語会・館長の独り言）			1
会員の広場			3
歴　史	伊藤博文という政治家ーその3（最終回）	臺　一郎	3
歴　史	「了解日本（日本を知る）」（24）10，外来文明の三部作（3）「外国文明に対する日本人の態度」	兪彭年	6
歴　史	E・ライシャワーの日本昭和史（3）	津田孚人	10
事務局			12

****

TENTI　TODAY

****

時候の挨拶では、「残暑見舞い」ですが、高温の日がつづきき、残暑の気分にはなりません。大型台風が上陸中、被害が心配です。台風一過、秋近しとなると良いのですが・・・。一方、甲子園は猛暑の中、熱戦が繰り広げられ、岸田首相の突然の退任表明、列島、まさしく分裂下にありますが、「戦争は二度とせず」という日本国民の絶対的な決意は、分裂することなく守らなくてはダメです。

****

最近、「快眠」が遠ざかりました。運動はしない、頭脳も使わない（？）、アルコールも飲まない生活下では、当然なのでしょう。先日、「快眠」とは言わずとも、「準快眠」を期待して、医師に睡眠薬の処方をお願いしたところ、一蹴されました。「目覚めたあとも効能は残り、怪我や事故の源になるので止めときなさい」とのこと。「快眠」は諦めました。

****

広島に帰居した久保さんからの便り

港入り江の春告げて　流るゝ川に言葉あり
燃ゆる焔に思想（おもい）あり　空行く雲に啓示あり
夜半の嵐に諫誡（いさめ）あり　人の心に希望（のぞみ）あり

広島には、平和記念公園に永遠に燃えつづける焔「平和の灯」があり、その種火が宮島大聖院の「空海・消えずの火」だそうです。上記、土居晩翠「天地有情」の中の一篇は、広島にふさわしい詩編のように思えてきました。

****

すどう美術館　「作品展」並びに「朗読と落語の会」

会場：「ギャラリーぜん」　秦野市立野台１－２－５　十全堂薬局ビル2F
（小田急線秦野駅より2番バス　日赤病院前下車）
電話：０５０－３５５５－４０３１　web: wwwhadanogalleryzen.com

◎作品展　―人間賛歌―「菅　創吉展」
　　日時　２０２４．９．１（日）～８（日）　午前１１時～午後４時　（但し４日（水）休館）
　　須藤館長の講演　９月７日（土）午後３時より（無料）

◎「朗読と落語の会」　９月７日（土）　午後４時より
　　朗読・語リスト　泉田洋子　　落語・立川志らら（立川流真打）
　　会費：２千円　要予約（定員４０名）

「独り言」：須藤一郎館長・

　最近映画化もされ話題になっている佐藤愛子さんの著書「九十歳　何がめでたい」を読んでみました。愛子さんはもう１００歳になっており、１０年近く前に著した本の増補版で、そのあとの著作もありますが、私も九十に近い年齢になっていて関心を持ったためです。

　愛子さんはご存知の通り、往時有名だった佐藤紅緑さん（１８７４～１９４９）の娘であり、サトウハチローさん（１９０３～１９７３）は異母兄ですね。

　文学少年であった私は、紅緑さんの「ああ玉杯に花うけて」や「夾竹桃の花咲けば」などの本の愛読者でした。ハチローさんの著書も愛読していましたし、今も歌う私の得意とする童謡歌「かわいいかくれんぼ」の作詞者でもあります。

　さて愛子さんの「九十歳。・・・・」の本すごいです。目次を開くと最初から「こみ上げる憤怒の孤独」「来るか？日本人総アホ時代」「老いの夢」などの章が目に飛び込んで来ます。

　読み進めると、歯に衣を着せない語り口でズバリ、ズバリと思うことを語っていて小気味いいですね。昔流にいえば、まさに「男勝り」の風情です。

　ご本人は、実際はもう弱弱しくなっているのに声だけは大きいので元気そうに見えるのだと書いていますが、どうして、どうしてそれから十年も元気でいるのですから。草笛光子主演の映画もぜひ見てみたいです。

　ひるがえって八十八歳の私、もうずいぶん長生きしたと思っています。長く生きていて辛いのは親しくしてきた多くの人たちとの別れに出あっていくことです。ご近所でお世話になった人、大学時代の友人、会社時代の仲間たち、その他もろもろの人、そして何より六十四年も付き合ってきた妻の死、本当に悲しく思います。「長生きして何がめでたい」と切実に感じます。

　でも私はこんな風にも思い直しているのです。人間としTこの世に生を受け、これまで、たくさんの人に助けられてきた幸せ、そして感謝。ですから世の人に少しでも恩返しをしていかなければということです。

　いつ死んでもとの覚悟のもと、動ける限りはささやかながら美術を通してになりますが、人の役に立つことをしていかなければと思うのです。

　その意味で長生きは「めでたい」こと。私だけの合言葉は「まだまだ、これから、これから」です。

２０２４年８月

****

会員の広場

****

伊藤博文という政治家－その3（最終回）　　臺　一郎　（75歳）

前回では政治家伊藤博文の功績を 3 つほど紹介した。今回（最終会）はその続きと伊藤の交友関係について書いてみた。

日清戦争の勝利と国益確保の講和条件

伊藤博文　四つ目の功績は、日清戦争を早期に終らせ勝利へと導いた戦時外交及び、講和条約の批准を通じた国益の確保である。英国との不平等条約の改正達成より 3 ヶ月早い明治 27 年（1894 年）4 月、我が国は、清国による朝鮮への軍の派遣及び朝鮮の属国扱いに対する強い不満、そして我が国土の平和と安全への将来的不安から、清国との間で戦争状態に入った。当時清国はアジアの超大国と見なされていた。

当然のように欧米各国は日本の敗戦を予測した。しかし、首相の伊藤と外相の陸奥による戦略的で巧みな戦時外交や、陸海において日本軍が連戦連勝したことなどから、翌年には清国側から停戦と講和の打診が行なわれた。

英国や米国からの要望もあり、我が国は講和会議の開催を受け入れた。日本側全権は首相の伊藤博文と外相の陸奥宗光、清国側全権は北海艦隊司令官の李鴻章と外務部局長の李経方で、会場は伊藤の希望で下関の旅館春帆楼となった。

春帆楼は眼下に関門海峡を望み、清国とは未だ交戦中であったがために、続々と遼東方面に向かう日本海軍の艦船が見えて、敗色濃厚な清国側代表はますます弱気になったという。伊藤はこうした心理的効果も狙って、春帆楼を会議の場に指定したのだ。

講和交渉の結果、1）清国は朝鮮を正式な独立国として承認する、2）遼東半島、台湾、澎湖諸島を日本に割譲する、3）賠償金 2 億両（3 億円）を日本へ支払う等を主な条件として、両国は停戦と講和に合意し、明治 28 年（1895 年）4 月 17 日に両国の全権が調印、4 月 20 日には明治天皇が批准して講和が成立した。

こうした中、ロシアは日清の講和交渉に終始強い関心を示し、調印されるやいなや講和条件への反対を通告し、天皇の批准から3日後の4月 23 日にフランス、ドイツを伴って3カ国の公使が外務省を訪れ、遼東半島の還付を勧告する覚え書きを手渡した。伊藤や陸奥など政府首脳は協議の上、遼東半島を 4000 万円強の還付金と引き替えに還付することとした。

結果清国側の割譲は台湾及び澎湖島のみとなったが、他の講和条件は当初案と変わらぬままで講和が確定した。日清戦争における勝利は、国際社会での我が国の地位や存在感を大きく向上させ、平時の一般会計予算の3倍にも相当する3億円の賠償金を得たことで、我が国は 10 年後の日露戦争までに十分な軍備増強が

可能となった。

日露戦争の早期停戦と講和のための工作

五つ目の功績は、日露戦争開戦後の早い段階で、伊藤が側近の政治家 金子堅太郎を米国に送り込み、日露間の講和の実現に向けて米国大統領や議会関係者への仲介打診並びに、米国世論を親日的なものにするための広報的活動に取り組ませたことである。

金子は第一次伊藤内閣で総理秘書官を務め、憲法草案の起草にもあたり、第二次伊藤内閣では農商務次官を、第三次伊藤内閣では農商務大臣を、そして第四次伊藤内閣では司法大臣を務めるなど、まさに伊藤側近の政治家とも言うべき有能な人物だ。金子は伊藤の要望に応えて米国へと渡り、ハーバードロースクール時代の先輩で当時の米国大統領セオドア・ルーズベルトと接触したほか、全米各地でこの戦争の開戦に至る日本の正当性や蓋然性について演説し、米国世論の日本への好意的な空気の醸成に貢献した。

明治 38 年（1905 年）5 月 27・28 日の日本海海戦において、日本海軍がロシアのバルチック艦隊に完勝したのを契機として、米国のルーズベルト大統領は日露両国に対して講和会議の開催を提案し、米国ニューハンプシャー州のポーツマス海軍工廠を会場に、日本側全権小村寿太郎外相とロシア側全権ウィッテ元蔵相による講和会議の開催に漕ぎ着けた。

この会議で日本はロシアの領地であった樺太の南半分の割譲、南満州鉄道及びその沿線の鉱山等の権益獲得、朝鮮に対するロシアの影響力の完全排除等を実現した。また、アジアの新興国に過ぎなかった日本が、当時世界最大の軍事大国であったロシアと戦争して勝利したことは、日本の国際的地位と存在感を飛躍的に高めた。

以上の五つの外にも、1905 年の第二次日韓協約で日本が韓国を保護国化した際に伊藤は統監府の統監に任ぜられ、韓国社会の安定化や民生水準の向上等に尽力した。しかし、韓国国民からすれば、それらは屈辱や抑圧の歴史とも映り、それ故に伊藤は明治 42 年 10 月 26 日ハルピン駅頭において、韓国人テロリストらしき人物により暗殺された。よってここでは伊藤の功績や貢献としては敢えて書かない。

伊藤博文が果たした数々の政治的功績は、伊藤自身の優れた才能や器量、そして努力や頑張りに負う部分が大であるが、その背景には青年時代に出会った恩師や上司、生涯にわたる友人達、伊藤を信じて尽くしてくれた部下や後輩達による助言、指導、献身等があった。そこで以下では筆者の選んだ伊藤の交友関係や人脈を簡単にまとめてみる。

① **来原良蔵** 伊藤は 14 歳の時、長州藩の下級藩士として初めてのお役目で相模国に派遣された。その際に手付として仕えたのが作事吟味役の来原良蔵である。来原は伊藤を気に入り、一年後に萩に戻る際には吉田松陰に紹介した。お陰で伊藤は松下村塾への入塾を許され、吉田松陰との知遇を得た。更に来原の仲介により、二年後には来原の義兄の木戸孝允の手付きとなって江戸に滞在した。

② **吉田松陰**　松下村塾の塾生となった伊藤は、吉田松陰にその人柄を可愛がられ、藩が若手藩士 6 人を時局研修のため京都に派遣した際に、伊藤もその一人として加えられた。6 人の中には山縣有朋もおり、以来、伊藤と山縣は 50 年以上に渡って交友関係を続けた。伊藤は松陰から国際的な視野での時勢観察や時勢分析の必要性を学んだ。

③ **高杉晋作**　伊藤が高杉晋作と知り合えたのは、二人が同じ松下村塾の塾生となったからだ。数年後長州藩と英仏蘭米の四カ国艦隊が戦争となり、長州が敗北した際の講和交渉で、長州側の全権は高杉晋作が務め、英国帰りの伊藤はその通訳をした。またその後の藩内での派閥争いにおいて、伊藤は常に高杉を支援したので、高杉の厚い信頼を得た。藩内での高杉の影響力が強まるにつれ、伊藤の存在感も高まった。

④ **山縣有朋**　戊辰戦争で官軍の指揮官や司令官としての体験を積み、功績を残した山縣は、明治の到来と共に着実に日本軍のトップへと上り詰め、軍の増強と近代化に取り組んだ。伊藤は内政や外交など政治の分野でリーダーシップを発揮したが、この二人の貢献や協力により、我が国は明治期を通じて近代的な立憲君主国家へと発展した。

⑤ **木戸孝允**　青年時代の伊藤は藩から長崎にも派遣され、薩摩藩の協力を得て最新兵器の調達などに従事した。任務が終る頃に伊藤は来原から木戸を紹介され、やがて木戸の手付として共に江戸藩邸に赴任した。木戸は長州藩士のリーダー格となり、伊藤はその側近として薩摩藩や朝廷関係者にも知られるようになった。二人は岩倉使節団に参加し、帰国後の征韓論の打破活動などで伊藤に対する木戸の信用は一層高まり、木戸亡き後は伊藤が長州閥の政治的リーダーとなった。

⑥ **井上馨**　木戸の手付として江戸藩邸詰めとなった頃の伊藤は、そこで生涯の友となる井上馨と出会った。以来二人は伊藤が亡くなるまで友として助け合った。幕末に長州藩は若手藩士 6 名を留学生として密かに.英国に送り込んだが、伊藤と井上も含まれた。明治時代となり、伊藤が内務卿や内閣総理などに就任するようになると、井上は外務卿、外務大臣、農商務大臣、大蔵大臣など伊藤内閣の主要閣僚として伊藤を支えた。

⑦ **大久保利通**　薩摩出身で 11 歳も年長。そんな大久保と伊藤が親しくなったのは、明治四年から 633 日を掛けて欧米を視察した岩倉使節団に参加したからだ。伊藤は 47 名の参加者中で最も英語が堪能で、且つ今後の国造りについても自分なりの考えを持っていた。そんな伊藤を大久保は評価した。視察から帰国するや、伊藤は持ち前の行動力と説得力で征韓論を打破し、西郷の訪韓を中止に追い込んだ。大久保の伊藤への信頼は決定的に強まり、大久保暗殺後には伊藤が内務卿を引き継いだ。

⑧ **陸奥宗光**　陸奥は伊藤より3歳若い。青年期の二人が最初に出会ったのは幕末の江戸であった。以来二人の交友関係は明治 30 年に陸奥が 53 歳で亡くなるまで続いた。清国との戦争に勝利し、明治 27 年 4 月に下関講和会議を締結して以後の三国干渉を巧みにさばいたのも、明治 27 年 7 月に我が国が英国などとの不平等条約の改正を遂に成し遂げたのも、外務大臣として非常に有能な陸奥が、時の総理大臣伊藤博文を強力に支えたからだ。

⑨ **金子堅太郎**　金子は明治初頭に米国ハーバード大学のロースクールを卒業、帰国後に伊藤博文の首相秘書官となり、大日本帝国憲法の起草等に深く関わった。彼は伊藤の指導の下で憲法や皇室典範、貴族院令の草案作成にあたり、ま

た日露戦争の際にも伊藤の指示で米国に渡り、大学同窓のルーズベルト大統領との関係を活かして、米国のポーツマスにおける日ロ講和会議の開催や講和条件の締結に尽力した。

⑩ **津田梅子**　津田梅子が初めて伊藤と会ったのは明治四年だ。梅子が岩倉視察団と共に留学先の米国へ向かう船上だった。梅子は 6 歳。最年少の留学生だ。そして 11 年後の明治 15 年（1882 年）彼女は 17 歳で帰国、日本語が全く不自由であったことから、半年ほど伊藤の家族に英会話を教える住み込みの家庭教師となった。その後梅子は津田塾大学の前身となる女子英学塾を創設するが、その際にも伊藤は公私にわたり彼女を強力に支援した。

さて、こうしてみると、伊藤博文はかれこれ 40 年以上にわたり、我が国近代の外交史や政治史において、時に主役として、時に脇役として様々な功績を残し、貢献を果たしてきた。すなわち、近代国家としての我が国の発展やそのための法律・制度・組織等の構想、立案、そして実現。国運をかけた二度の戦争の勝利と戦後の講和会議における国益の追求や確保等である。その功績の多さと大きさは他に比類がない。

伊藤博文の果たした数々の功績や貢献に想いを馳せるとき、彼やその交友関係者の多くを育てた長州という土地に行きたくなる。

（以上、完）

****

「了解日本」(「日本を知る」（第24回）　　俞彭年　（87歳）

10. 外来文明の三部作（3）

11. 外国文明に対する日本人の態度

防衛大学長の五百旗頭真教授は著書『日米戦争と戦後日本』（講談社）の中で日本が強大な外部文明の挑戦を受けて、玉砕的な狂熱排外主義の道を歩むのではなく、辛い境遇に耐えて外部文明と対面し、その内部から外部文明の力の秘密を理解、把握し、そして自ら革新し、それによって外部文明を克服したと述べている。

この方途は、古代日本のヤマト王朝時代の中国文明対応で経験していて、「黒船（19 世紀に日本に来航したアメリカの艦隊）」以降の近代では、西洋文明への対応も同様であり、占領下された日本でも実践されている。五百旗は、この外部文明と日本との関係は、ヘーゲルの「精神現象学」で述べた主人と奴隷の弁証法であり、彼自身、勝者と敗者の弁証法と定義している。

竹内実・京都大学名誉教授の著書『中国—欲望の経済学』（蒼社出版）によると、（日本人の外来文明に対する心理は）憧れ—恐怖—吸収—嫌悪—拒絶。彼は日本人の外来文明に対するこのような心理は、中国文明に対しても、ヨーロッパ文明に対しても同様だと言った。平安朝時代に日本は中国・唐の文化を吸収することに熱心だったが、その後遣唐使を廃止し、ひらがなを発明してひらがなでの表現を発展させ、「大東亜戦争（米英などとの戦争）」では、欧州文明を嫌悪し、拒否をした。

竹内は、日本人の外来文明に対するこのような心理が今も存在していると考えている。

アメリカの政治学者ハーディングトン教授は著書『文明の衝突』の中で、日本には強大国に追随した歴史があり、今は米国に追随しているが、将来は何処に追随するのかと述べている。引き続きアメリカなのか、すでに台頭し急速に強くなっている中国なのか。

現在、日本の知識階層はアメリカが日本を置き去りにして中国に接近するのではないかと懸念し始めている。1902 年に日本は当時の世界大国だった英国と「日英防衛同盟条約」を締結し、英国の力を利用してロシアに対抗し、朝鮮半島と中国東北地方を手に入れたが、その後英国は日本を見捨てた為、1923 年に同条約は破棄されたという苦い経験がある。

彼一時，此一時（あの時はあの時、今は今．以前と現在とでは事情が違う）

中国の改革開放 30 年、その間に世界情勢は大きく変化し、中国も日本も大きく変化し、中日関係は縦方向の上下関係から横方向の水平関係に変化した。

1990 年代初頭、冷戦が終結し、時代の主流は戦争と革命から平和と発展に向かい、経済のグローバル化が加速し始めた。世界情勢の大きな変化は、経済建設を中心とした改革開放政策を推進する中国にとって得がたい戦略的発展のチャンスをもたらしたが、日本にとっては世界情勢の大きな変化は、米国による日本への配慮と擁護を失い、激しい国際競争の渦に一気に投げ込んだ。

日本は極東の重要な戦略的位置にあり、米国と安全保障条約を締結しているため、冷戦中に日本は米国の庇護と配慮を得て、独自の平和的発展の路線を実施した。日本は戦後急速に復興しただけでなく、発展の道を歩み、1970 年代には近代化を実現、80 年代初めにはなんと米国に次ぐ世界第 2 の経済大国となったのである。

1970 年代、80 年代は日本の最も輝かしい時代だった。戦後復興から世界第 2 位の経済大国への飛躍まで、日本はわずか 30 年余りの時間を費やしただけだった。

しかし、1990 年代初頭の冷戦が終わり、米国の擁護と配慮が消え始めると、国際的な激しい競争に直面し、国内経済はバブル崩壊を起こし、結果的に 90 年代全体が経済発展の停滞、政局の不安定、国民が先行きの不透明さを嘆く局面を迎えた。その為日本人は 90 年代を「失われた 10 年」と呼んでいる。

過ぎ去ったばかりの 21 世紀の最初の 10 年はどうだったのだろうか。

2009 年 12 月 30 日の日本経済新聞では、「21 世紀最初の 10 年は日本経済が＜萎縮した 10 年＞だった」と報じた。経済学者の予測によると、2009 年の日本の名目 GDP は約 473 兆円で、1999 年より 5%減少した。10 年間で日本の GDP は年平均 0.5%減少した。「失われた 10 年」、「萎縮した 10 年」、前進せず後退し、その 20 年は、「日本はいったいどうしたのか」と思わず聞きたくなる。1960～80 年代の急速な発展の勢いはどこへ行ったのか。原因には当然内的要因と外的要因がある。

急速に経済を回復し発展させることができた元々の 5 つの内的要因は、

（1） 国内の教育文化水準の高い労働力が豊富である。
（2） 経験豊富な官僚と技術者がいる。
（3） 日本人が勤勉でプロ意識がある。
（4） 労働者の賃金が低い。

（5）　日本が平和的な発展の道を歩み、それによって国防費を低く、残りの財源は経済発展に用いることができる。

である。

「少子高齢化社会」は国内の労働力を減少、緊張させ、現代化生活を享受する若者は高齢世代のように勤勉でプロ意識もない。国内生活水準の上昇により賃金が高くなり、政治的軍事的大国に向かっている為、国防費も増加している。

急速な回復と発展を遂げた 3 つの外的要因がある。

1)世界が冷戦下にあり、日本が米国をはじめとする西側陣営に加盟したこと。

2）日本が米国と同盟を結び、軍事的、経済的な庇護を得たこと。

3）日本が世界で絶えず発生している局地戦争から「特別需要」を得て輸出を拡大し、経済発展を刺激したこと）にも変化が現れた。

世界的な冷戦が終わり、日米関係に変化の基盤が、確実に変化し始めた。日本は二度と米国の経済的庇護と支援を得られず、逆に米国の絶え間ないプレッシャーを受けて、世界の局地戦争の「特別需要」が減少した。さらに米国など西側諸国は日本に「国際貢献」を求め、彼らのためにお金や物資を提供し、日本の負担を増大させた。

歴史を通じて、日本の台頭は中国の衰退と関係がある。1868 年の明治維新以降、日本は資本主義を選択し、戦争発展の道を歩み、清帝国の衰退と北洋軍閥政府の無能さと、さらに加えてヨーロッパが第一次世界大戦を戦い、西側列強が東方に顧みる暇がなかったために、日本に資本主義の対外拡張を発展させる戦略的チャンスを与えたのである。

日本は中国の衰退を利用し急速に侵略拡大を実施し、すぐに東アジア大国となり、東アジア同盟のリーダーであると主張しだした。日本が第二次世界大戦に敗戦後、平和発展の道を歩み始めた 50 年代から 70 年代にかけて、中国はまだ改革開放されておらず、アジアの 4 頭の虎はまだ現れていない。

日本はアジアで唯一近代化を実現した国であり、米国の庇護と配慮に加えて、日本は当然のように東アジア経済発展のリーダーとなり、日本の心は依然として東アジア同盟のリーダーであると自負している。

日本史における「朝鮮特需」とは、1950 年 6 月から 1953 年 7 月までの朝鮮戦争が日本にもたらした経済的利益を指し、日本は国連軍に補給物資と労務サービスを提供し、綿布、毛布、土嚢用麻袋、軍用車両、鉄菱（ヒシ）などは主要な軍需物資であり、車両修理、基地建設、輸送、通信などは労務サービスの主要な内容であった。

3 年の朝鮮戦争で日本は約 10 億ドルの特需を得ており、賠償対象の一部軍需工場は在日米軍基地の発注に特化した生産をしている。日本はドルを獲得し、輸入原材料の加工輸出は、加工貿易立国である日本の再建に素晴らしい役割を果たした。

また、朝鮮戦争は日本に輸出拡大の大きな利益をもたらし、朝鮮戦争による需要の増加に伴い世界貿易も拡大し、1951 年の日本の輸出額は 65%増加し、鉱業生産は 38%増加し、企業収益率は 2.2 倍増加し、外貨準備高は 1949 年の 2 億ドルから 1951 年の 9 億 4000 万ドルに上昇した。

このことから、朝鮮戦争は日本経済が戦後の疲弊から回復する過程で非常に貴重な大きな推進作用を果たしたことがわかる。1960 年代から 70 年代初頭まで続いたベトナム戦争は日本にとってまた富を築く好機であり、日本の役割は依然として米軍への物資補給と労務提供であり、この期間は朝鮮戦争よりずっと長い。つまり日本は二つの戦争で思いがけない大儲けをした。

世界は 21 世紀に入り、中国は 30 年にわたる改革開放を経て台頭し始め、世界と東アジアは様変わりした。四虎の台頭、中国経済の急速な発展、東南アジア諸国の経済発展、東アジア各国の経済発展により、地域の主役の存在が見えなくなった。

これは、日本がもはや東アジアの経済発展のリーダーではなく、東アジアにおける日本の地位と影響力が低下し始めたことを意味する。そのため日本は、急速に発展する中国が東アジア同盟の指導者の座を日本から奪うのではないかと疑っている。

21 世紀に入り、30 年間の改革開放によって中国は大きく発展し、日本は 1990 年代からの発展の停滞、21 世紀最初 10 年間の経済萎縮と東アジアでの地位の相対的な低下に加え、中日両国関係は縦方向の上下関係から横方向のレベル関係に歩み始めた。

以前、日本は強くて中国は弱く、日本は発達していて中国は遅れている、国力と心理上の両面で、縦方向の上下関係を形成し、日本は上で中国は下、日本は中国を下に見ていた。

現在、関係は横方向の水平関係に向かい始め、これは中日両国の近代史と現代史上の重要な転換であり、これによって両国の各方面の関係と両国民衆の心理は徐々に変化し始め、それによって中日両国の新しい関係が構築してきている。

2006 年 10 月に日本の安倍晋三首相が訪中し、中国と「戦略的互恵関係」を構築した。これは横方向への水平関係の表れである。両国が横方向の水平関係に適応するには、比較的長い「すり合わせ」期間が必要であり、特に心理的なすり合わせは長い時間がかかるだろう。

私たちが、水平的な関係を冷静に認識するのはまだ始まりにすぎない。現在、主に経済規模、GDP における水平的な関係を指している。国際通貨基金の 2007 年の統計によると、中国の国内総生産は 3.2 兆ドル、日本は 4.3 兆ドルで、その他の面では私たち中国はまだ日本に遅れている。

例えば、一人当たりの GDP は私たち中国が現在 2.4 千ドル、日本は 3.4 万ドルで、社会保障制度の面では私たち中国はまだ創設段階にあり、日本は健全な段階にある。科学技術と教育の面では私たち中国は全体的に発達しているとは言えないが、日本は発達しており、環境保護、生態保護とその人々の意識の面では私たち中国はまだ初期段階にある。

日本は安定した発展段階であり、社会の文明と成熟度の面で私たちはまだ大きな道を歩んでいるが、日本はすでにかなり文明的で成熟している。とにかく全体的に比較するなら、私たちは正直に私たちの不足を認めなければならない。私たちは浮ついてはいけない。夜郎自大的な歴史的過ちを繰り返してはいけない。中日両国はやはり日清戦争以前のように学び合い、お互いを参考にし、融合しなければならない。

30 年の改革開放を経て、中国は台頭し、名実ともに大国となり、強国へと歩み始めた。日本は傍で中国をはっきり見ているので、ここ数年、多くの日本人は左翼、中立、右翼に関わらず、親中、中国を理解している人、反中を問わず、中国について

議論している。議論の中には意見が一致した一言がある。中国語に翻訳すると「中国は恐ろしい」となる。

日本の京都大学名誉教授で著名な中国問題専門家の竹内実氏はある記事で、「中国は恐ろしい」の「恐ろしい」の翻訳は適切ではなく、「中国は畏怖である」と訳すべきだと指摘し、かつて「恐ろしい」とも訳された劉徳有氏（初期に中央指導者に日本語翻訳をし、後に新華社駐日特派員、文化部副部長を務めた）自身も「恐ろしい」と直訳するのは適切ではないと感じていると述べていた。

竹内さんが日本語を話すその言葉は直訳すると「怖い」ということになりますが、この場合は「怖い」ではなく「後生畏るべし」という「畏れる」という意味なので、日本人は「中国後生畏れる」という意味です。

竹内氏は指摘するが、「畏怖すべき」には感心の気持ち以外にも、もちろん畏怖の気持ちが混じっている。竹内氏の分析によると、現在の日本人は国土面積が日本の 26 倍、人口が日本の 10 倍、文明の歴史が日本の 3 倍近くある大国中国が 20 年以上にわたる改革開放を経て急速に発展する道を歩んでいることに畏れを感じるようになっている。

日本は 1894 年の日清戦争、1904 年の日露戦争に勝利してから、強国意識と大国意識が急速に増加し、「大日本帝国」を自称して衰退した大国中国を眼中にしなくなり、中国、中国人を見下し始める。1 世紀ぶりに日本人が「中国は恐ろしい」と言ったのは、中国人民が百年以上も粘り強く奮闘し、改革開放政策を堅持して 30 年が実り、人々は別の目で見始めたことを示している。

しかし、「畏るべし」には「畏怖」の気持ちも混じっており、周辺国は大国中国の台頭、強国中国の出現に対して畏怖の気持ちを含む複雑な感情が芽生え、私たちは彼らの複雑な気持ちを理解し、同時に中国が平和的発展の道を歩んでいることを絶えず明らかにしなければならない。

中国の主張は互恵協力と調和のとれた WinWin の状況であり、中央政府が指摘したように、政治的影響力と経済競争力を強化するだけでなく、道義的な感化力とイメージ的な親和力を強化しなければならない。

現在日本はどこへ向かうのか。アメリカ文明に対して、いわゆる「憧れ・恐れ・吸収・嫌悪・拒絶」の公式における「嫌悪」の段階に入りつつあるのだろうか。未来の日本はどの文明に憧憬しているのだろうか （つづく）

（２０１１年６月）

****

E・ライシャワーの日本昭和史（３）　　津田　孚人（８７歳）

参：「ライシャワーの昭和史・ジョージ・R・パッカード著・森山直美訳、講談社」

ライシャワー家の兄弟、ロバートとエドウィンは、東京ではほどほどに安楽な生活を送っていた。数人の召使がいて明治学院キャンパス内の洋風の家に住み、夏になれば蒸し暑い東京から逃れて軽井沢で過ごした。しかし一家は決して裕福ではなかった。年間３００ドルというオバーリン大学の授業料は家計に大きく響いた。エドウィン・ライシャワーは、１７歳になるまで３回しか渡米したことがなかった。日本こそ自分の故郷だと思っていた。田園環境に恵まれた、少人数の学生と教職員からなるコミュニテイーであるオバーリンは、エドウィンが自分としてのルーツを発見し、国際問題に対する関心をはぐくむのに絶好の場所となった。

１８３３年に創立されたオバーリンは、多様なものの見方を受け入れ、社会改革を奨励するという学問環境を誇りにして、草創期から女子学生を受け入れていた。アメリカで真に共学を実現した最初のカレッジと自任していた。また、アフリカ系アメリカ人にも門戸を開いた一校でもあり、教授の中には、南北戦争で決着がつく前から、奴隷制廃止を主張したものが幾人もいた。１８８８年、アメリカ下院議員に黒人として最初に選ばれた、ジョン・マーサー・ラングストンは同校の出身者だった。

オバーリン大学は、１８８０年代に教科過程を拡大し、進化、政治経済学、国際法の講義を新たに加えたほか、キリスト教にもとづく内なる人格形成から、外部へ眼を向けた社会改革と善行の重視へと焦点をうつした。

ライシャワーがオバーリンにきた１９２７年頃には、個人は生来、自分の理性の力を使って真理に到達する能力を備えているという信念、すなわちリベラリズムの風潮がみられ、人間の言動の基準としての神への純粋な信仰の力はおおむね影をひそめていた。

エドウィン・ライシャワーにとって、両親の信仰と新科学の対立は耐えがたいジレンマとなっていた。オバーリン時代に親の信仰の神学的基盤に疑いが芽生え、東京の両親のもとを離れたときから、一度も教会に行かなかった。キリスト教関係の自らのルーツを離れたことは、多大な苦痛と狼狽をもたらした。生涯を通じてクリスチャンの友人、知人や、両親の友人が宗教的な事柄について助言を求めると、いつも礼儀正しく穏やかに反対して話題を変えた。駐日大使、長老派教会系の「ライフ」の記者に、どうして両親のあとをついで宣教師にならなかったと質問されると笑顔で。「いや私は宣教師ですよ」。ただし民主主義を広めるための宣教師なのです、と答えていた。

ライシャワーがオバーリンで過ごした４年間（１９２７年～３１年）は、日本も世界も激動の時代にあった。日本が西欧列強に協調しようとした１９２０年代半の「幣原外交」のあとに、陸軍将校たちは超国家主義者たちと画策し、脆弱な「大正デモクラシー」を破壊した。１９２７年、金融危機が引き金になり、憲政内閣は崩壊した。翌２８年、関東軍は満州を支配した中国の軍閥の首領、張作霖の殺害を工作した。田中義一首相は、天皇に同事件の調査を約束したが、はたせなかった。天皇に追及された田中は辞任し、それからほどなく病死している。

１９３０年、文民宰相の浜口雄幸が狙撃され、それがもとで翌年死亡。３２年には犬養首相も殺され、４５年まで文民政府は中断する。１９３１年までには、関東軍は満州侵略へと事件を工作し、太平洋戦争へ向かう一歩を踏み出した。

オハイオの田園にあるオバーリンにいたライシャワーは次のように語っている。「日本のことは誰の頭にもなかった。 月の裏側にあったと言えるかもしれない。カレッジでは日本については何も教えていなかったし、当時の大方の学生がそうだったが、私たちもまったく新聞を読まなかった。そもそも新聞に日本のニュースはほとんど載っていなかった。

日本で生まれ育ったという経歴のために、ライシャワーは歴史学部のアメリカ人学生のなかで一風変わった存在になった。その頃、大學で使われていた伝統的な歴史教科書は、メソポタミアのシュメール人から始まり、エジプト、ギリシャ、ローマ、さらにユダヤ＝キリスト教文明へとつづき、西ヨーロッパ隆盛へといたる。ヨーロッパ文化の本来的な優越性は、持ち前の、あらかじめ定められたものであるかのように西欧文明の隆盛を描写していた。中国と日本が紹介されたとしても、１６世紀に西欧の探検家によって発見され、歴史的に取り残された一地域として取り扱われる程度だった。

ライシャワーはそうしたヨーロッパ中心の視点を排して歴史研究に取り組み、研究のもっとも初期から、中国と日本の文化と歴史に、ヨーロッパの文化・歴史にも劣らないほどの興味と重要性を見いだした。１９３０年代にこのようなアプローチをしたアメリカの歴史家は極めて少数だった。

オバーリンでの体験は、東アジア、仏教、歴史、国際問題の研究と、教育と執筆に携わる学者のキャリアを暗示していた。

１９３１年の夏、オバーリンから東のハーバードへ向かった。大恐慌の最中だった。アメリカの仕事口は払底し、到る所に失業者があふれ、アメリカは世界からいっそう孤立を深めつつあった。

輸入品にかかる関税を引き上げた１９３０年のスムート・ホーリー法は、アメリカの産業保護を意図したが、じっさいには世界恐慌を深刻化させ、アメリカの輸出業者にダメージを与えただけだった。世界貿易は縮小し、戦争の暗雲が厚く垂れこめていた。

ハーバード大学は、ライシャワーが教育を続けるための２番目の選択肢だった。最初の志望は、オックスフォード大学で３年間学ぶことだったが選考に漏れ、大学院で東アジアの研究をするという道がるのは、コロンビア大学、カリフォルニア大学バークレー校、ハーバード大学の３大学だけだったが、どこも東アジア関係は、ばらばらな少数の講座があるだけだった。エドウィンは、フェローシップを設けている研究所があること、兄のロバートが先に行っていたという理由で、ハーバードを選んだ。

ハーバードに東アジア研究の学部がなかったので、エドウィンは兄にならって３１年の秋に歴史学部に入り、翌年春には修士号を取得した。成績有鬚で多くの課程でＡをとった。日本語と中国語の語学課程もとることにしたが、たった一つしかない日本語課程があまりにも初歩的なので、中国語の入門コースをとり、ほかに１学期だけ中国史購読をとった。

中国語のコースはふたを開けてみると悪夢だった。教授は話し言葉の声調にほとんど知識がなかった。当時行われていた多くの中国語習得法の例にもれず、「目的は中国語の読み方を学ぶことで、しゃべることではなかった。ヨーロッパの一流の中国学者の中には、ほとんど中国へ行ったことが無いのを誇る人さえいた。中国学は、エジプト学の精神で育ってきており、中国語を、全人類の四分の一近くの人びとの生きた言語としてではなく、死せる言語として扱っていた」。

西洋人の初心者が、たとえ現代語であっても、漢字を学ぶことがいかに困難であるかは、とうてい言葉で説明できるものではない。中国の高校生程度の最低の読み書能力をつけようとして２千語の習得を目指すだけで、毎日２５から５０の表意文字を丸暗記しなければならない。近道はない。すぐれた記憶力と、中国語をマスターしたい、という意気込みと、執拗なまでの強い意志、根性がなければ難しい。

（つづく）

****

事　務　局

****

天地シニアネットワーク事務局　（津田　孚人）
住所：〒１１６－０００１荒川区町屋３－２－１

ライオンズプラザ町屋７０３
メールアドレス：tentisenior06@gmail.com
電話・FAX：０３－３８１９－７６５１